

Title	櫻木晋一君博士学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2010
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.79, No.4 (2010. 12) ,p.128(468)- 132(472)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20101200-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

櫻木晋一君博士学位請求論文審査要旨

論文題名 貨幣考古学序説

終章 貨幣考古学の地歩

論文要旨

櫻木晋一君提出の『貨幣考古学序説』（慶應義塾大学出版会・二〇〇九年六月）は、新しい研究領域としての「貨幣考古学」を提唱するとともに、その具体的な分析方法と結果を示すことを目的に出版されたものである。論文は、以下のように二部構成であわせて一章から成り、総ページ数は三二五である。

序論

第一部 貨幣考古学総論

- 第一章 貨幣考古学の確立
- 第二章 セリエーション分析による編年
- 第三章 銭貨の技術史的研究
- 第四章 貨幣考古学の課題

第二部 貨幣考古学各論

- 第一章 出土古代貨銭
- 第二章 出土六道銭研究
- 第三章 一括出土銭について
- 第四章 個別出土銭研究

- 第五章 近世の出土貨幣
- 第六章 海外での貨幣調査

第一部の冒頭部分において、櫻木君が提唱しようとする「貨幣考古学」の学問の特色が示される。すなわち貨幣とは古代から人間が製作し使用してきた考古学的な遺物の一種であり、特に土中から出土した貨幣を扱うのが、「貨幣考古学」であると位置づける。従来用いられてきた「出土銭貨研究」を、より考古学的方法に則り、経済的な使用に加えて人間社会の様々な側面に関連づけ、研究を進めるものとする。

次には、貨幣考古学研究にかかわる用語の整理と規定を行う。古くから備蓄銭・埋納銭などと呼ばれてきた大量の出土銭については、土の中から発掘されたという客観的事実のみを示す「一括出土銭」という統一的用語使用を提示して、本研究の基本姿勢を示す。

第二章において貨幣史の研究においては、遺物の分類結果をセリエーショングラフという図化された形で時間的な変遷を示す考古学的手法が極めて有効であることを主張する。ことに墓標がなく埋葬時期が特定しにくい中・近世の墓の編年には、副葬された六道銭の銭種の組み合わせによって、渡来銭から古寛永銭への迅速な貨幣の切り替えなどの政治的・経済的な変化が把握できる利点を明示している。

続く「錢貨の技術史的研究」で、物質文化としての錢貨の生産技術の変遷や金属組成分析など自然科学的側面からの研究に踏み込こむ。ここでは、文化財科学的に錢貨の鑄造技術・製作地・真價などの判断・判定が可能であることを示し、これによって貨幣考古学の学際的な広がりや深化を示している。そして中世のわが国では、専ら中国からの輸入錢を使用したとする定説に対しては、博多・京都・鎌倉などの都市から錢の鑄型が出土している例や、北関東の遺跡における「枝錢」出土の事例など、国内での生産の事実も考古学的に裏付けられるとしている。

第一部の最後の章では、古代から中・近世にいたるまでの各時期における貨幣考古学の課題について述べる。ことに強調されたのは、資料の批判的解釈の重要性、そして文献史学と考古学、自然科学的分析との融合の意義などであり、その上での出土錢貨研究の基本的な意味の再検討を促している。また、今日の中国においては出土錢貨の調査・研究が困難な現状を示し、錢貨に元号が記される意味や鑄造技術の変化などの点からも東アジアの中の日本という観点での共時的な考察の重要性を説く。本論後半の第二部では、特に論者が長年にわたり調査研究を行ってきた九州での具体的成果を基に論が組み立てられていく。まずはじめに九州における「和銅開珎」以降の古代錢貨の出土状況を紹介し、その流通の特徴を示す。その中には、畿内に比べて九州における古代錢貨の出土数が少ない事実から、律令国家の政治的権力がさほど及ばず、同地方には十分な錢貨が供給

されていなかった等、斬新な解釈も見られる。

次に、中世から近世へと連続する習俗である「六道錢」について、主に九州内に所在する多数の遺跡から出土した具体的事例を基に、その特色が述べられる。一般に、死者に六道錢を副葬するこの習俗は「六道思想」が普及・定着していった中世に始まるが、九州では行政の末端組織として仏教寺院が取り込まれていく近世になって広範に認められるようになる点、及びセリエーション分析によれば関東地方と同様に渡来錢と寛永通寶の流通には明らかな不連続が認められる点などが示される。一方、近世初頭の渡来錢の中に「永楽通寶」の出現割合が低いことなど、東国とは異なる錢貨流通傾向も「六道錢」の分析により明らかにされている。

さらに論者自身が調査を手がけてきた、より大量に出土する「一括出土錢」に議論が続く。その結果、かつて鈴木公雄が東国で示したものと同様に、当時の社会に流通していた錢貨の種類構成がそのまま一括出土錢に反映していると推測し、全国ではほぼ齊一的な錢種が流通していたものとしている。すなわち、一括出土錢とは、当時流通していた精錢のみを無作為にストックしたものである、との結論に至る。

次の章では、九州北部の博多遺跡群における一つの調査地点の実例に即して出土の実態を提示した上で、博多における個別出土錢について包括的に論ずる。そして、中世全体を五〇年ごとに区切り、それぞれの時期における個別出土錢の検出枚数の変異を、この都市をめぐる経済・政治情勢との関連において意

味づける。それと堺・一乗谷・豊後府内・草戸千軒などの事例に関する同様の分析結果とを比較し、この種の資料から引き出せる歴史情報の豊かさを示している。さらに、そうした個別出土銭の中からいくつかの銭種をピックアップして、例えば中世を通じての銭種別出土枚数では元豊通寶が一位であり、国内の一括出土銭（皇宋通寶が一位）よりもむしろ中国の窖藏銭と共通する、という興味深い情報を引き出すなど、中世日本最大の貿易港・博多における貨幣流通の特質を示す。

次の「近世の出土貨幣」では、近世の遺跡から出土した貨幣をめぐるいくつかの重要な視点が提示されている。具体的には、考古資料からみた近世初期の撰銭の実態から、安国良一の京銭による貨幣統一段階を設定する説が支持し得る点、出土寛永通寶の鑄造地や銭座の研究、石製鳥居や石塔などの石造建築物にみられる「埋納銭」の研究が今後の重要課題である点を指摘する。また、長崎奉行所跡・出島・長崎市内・原城跡の出土銭貨、小倉城新馬場遺跡出土の清銭、三本松遺跡・黒崎城跡・萩城跡などの出土銭貨、出土金・銀貨の分析から、それぞれの地域的な特徴が明示される。

また「海外での貨幣調査」は、近年論者が取り組んでいる海外での貨幣考古学の調査の成果をとり上げたものである。ベトナム・ハノイにおける一括出土銭の調査からは、近世が中国周辺国家であるベトナムや朝鮮、日本において「庶民貨幣の誕生」の時期であったと述べているのは興味深い。また、ここに紹介されている英国のフィッツウィリアム博物館・大英博物館

所蔵の日本やベトナム貨幣、ケンブリッジ市の一括出土銭も、これまでには知られていなかった資料である。また、朝鮮の新安沖沈没船の銅銭を分析することによって、中国の私鑄銭の実態が判明し、寧波でこの船に積載された銭の銭種別出土量が流通銭貨の地域性の解明につながることを示す。

審査要旨

論者・櫻木晋一君は、故鈴木公雄君の強い影響の下、出土貨幣を研究テーマに選び、鈴木自身からもこの研究の後継者として期待された人物である。この分野は『出土銭貨の研究』という鈴木著書によって既に重要な論点の多くが提示され、その継承者の立場から新たに一書を編むには大きな困難があったと思われる。そのような状況の中で同君が選んだのは、「貨幣考古学」という新たな学問分野を打ち立て、その研究方法を体系的にまとめることであった。その成果は、本論前半の第一部に十分に表されていると言つてよい。

そうした研究作業の基盤を支えるのが、櫻木君が長年にわたって積み重ねてきた、九州地域における出土銭の調査・集成に基づく豊富な知見である。特に、貨幣考古学の個別の論点を掘り下げた第二部では、九州の古代出土銭貨を網羅的に提示・分析して、出土地の分布や性格について明解に考察することに成功している。また、六道銭の主要な出土例からは、中世・近世のそれぞれについて要領よくまとめた上で、歴史資料としての活用手法について説得力のある議論を展開した点は高い評価

に値する。

さらに、九州の一括出土銭に関しては、彼自身が調査に関わったものを中心に重要な事例について詳述している。また近世の出土貨幣については、北部九州の特徴的な出土事例を取り上げて、当該期の資料の分析方法の良い見本を示している。そして、日本における研究分野のうち、櫻木君自身がリードしてきた「個別出土銭」に関する優れた論考は、本論の白眉とも言うべき部分である。ここでも彼の議論にとつての中心的な基盤を成すものは、九州・博多における考古学からの具体的事例の集成であった。

この個別出土銭と並んで、櫻木君が自ら切り開いた新たな分野が、海外での出土銭貨の調査である。調査の対象も、ペトナムの一括出土銭、イギリスの日本貨幣コレクション、韓国の沈没船引揚資料と、バラエティに富んだ貨幣史研究として大きな成果をあげている。この種の調査・分析方法のサンプルを示すという意味でも成功していると言える。

さらにもう一つ、同君が積極的に推し進めてきたのが出土銭の理化学分析であり、これについても第一部で多くの具体例を示しながら方法論を展開するほか、第二部の各章でもそれぞれのテーマに即して理化学分析から得られた知見や期待される成果に言及している。これらを含め、豊富な実践例を通じて提示された「貨幣考古学」は、現段階におけるこの分野の高い到達点であり、その方法論は、大きな説得力をもつものであると言つてよい。

その一方で若干の不满がないわけではない。第二部前半の大部分では九州における数多くの出土事例をまとめて掲げてあるが、章によっては相当の頁数にわたってしまっている。これによって、やや羅列的な印象を与えたとともに、それらの事例を総合した分析の過程が読み取りにくくなってしまっている。また、「個別出土銭」を扱った部分では、事例提示と分析とのバランスは良いものの、全体に叙述が淡白であり、出土例のいくつかについてさらに詳細に論じた上で、より踏み込んだ分析をすることも可能であったようにも感じられる。

しかしながら、出土銭貨には地域的な特徴があり、経済面のみならず習俗など各時代の生活の様々な様相を示している点、さらに近世には日本以外に中国・ペトナム・朝鮮でも銭貨が広く流通し、東アジア社会を理解するために欠かせないという主張、「貨幣考古学」が世界的な視野をもっているとするなど、本論において導かれた諸結論には、強い説得力がある。そして、古代から中世・近世にいたる歴史考古学のなかに、江戸時代からの伝統的学問と、自然科学・社会科学を有機的に結びつけて、「貨幣考古学」という新しい研究領域を確立することに成功していることは、審査員一同が等しく認めるところである。

よつて、本論の著者、櫻木晋一君は博士(史学)の授与に相応しいと判定する。

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部・教授	阿部祥人
副査	早稲田大学人間科学部・教授	谷川章雄
副査	慶應義塾大学文学部・教授	中島圭一
学識確認	慶應義塾大学文学部・教授	阿部祥人